

国体の思い出

会長 木本芳樹

北海道チームの民泊が決まり、久保地区では、「心のこもったおもてなし」を合言葉にそれぞれの準備はしていたものの、不安は否めませんでした。最後の二週間は大変で、実行委員会とチーム担当から情報を得ながら、毎日、看板、横断幕、食事の献立、受け入れ家庭との調整、内外の飾り付け、歓送迎行事等々、どうにか選手の受け入れ体制が整いました。

いよいよ選手の到着です。バスから降りた選手の明るさで、今までの苦労は吹っ飛びました。まるで旧知のごとくの振る舞い、これぞ民泊の所以と感じたものです。

試合のほうは残念ながら、優勝チームとの対戦で負けましたが、雰囲気と若い活気と感動で、胸がいっぱいになりました。

お別れの時には、なかなかバスに乗らず、民泊の皆さんとの別れが辛い様子でした。

「やって良かった民泊」。北海道選手団、感激を有難う。今後の活躍を祈念します。
「またおいでませ！伝統の地、久保へ」



国体の思い出

調理班長 中村征子

平成23年は、調理班の班長の大役を担って、ことのほか長かったり短かったり、また、うきうきしたり動揺したりと、さまざまな体験をした年でした。

まず、食べることは健康の第一歩であり、それゆえに安心して食べるということが何より大切です。その為には、清潔を保ち栄養バランスの取れた食事を、選手の皆さんに美味しく食べていただきたいものです。

4月中旬、保健所の衛生講習を皮切りに、6班の班割り、工程表の作成等を念入りに吟味し、水無月の雨をたっぷり吸ったアジサイの咲くころ始めた第1回目の調理実習から、何度も回を重ね、その間に保健所からお墨付きもいただきました。

ささやかな食事ですが『おもてなしの心』で愛情込めて手作りさせていただこうと誓ったお陰で、4日間大過なく、無事に終わることができました。選手の皆さんから、喜んでいただいた時、肩の荷が『ドッ』と降りたのを覚えています。これも公民館の全面的な協力と、調理班の努力が成功に繋がったことはいまでもありません。ご協力有難うございました。

国体の思い出

歓迎班長 猪本英雄

久保民泊協力会の設立会議だ。いよいよ、山口国体開催が現実的なものとなってきた。私は、歓迎班に推薦された。メンバーも良い。

さて何をすればいいのか。前の開催県の資料を参考にしつつ、事務局の助成を得ながらの取り組みとなった。

「子ども国体県民運動」に応募し、小・中学生による応援看板、横断幕、のぼり旗を作成。素晴らしいものができた。特に、伝承芸能を模した看板はこれからの久保地区の発展に役立つであろう。「ヒノキのメダル」「生花」でのおもてなし、子どもたちの心がこもっている。

待ちに待った「北海道チーム」の来館。関係者、多くの地域の人達が待つ中、「松風太鼓」での歓迎。選手は明るく、乗りが良かった。ひと安心！さあ応援だ。久しぶりに燃えた。長岡外史も良く頑張った。そして祝勝会を兼ねた送別会。切山歌舞伎の衣装で記念写真。選手、民泊家庭、役員全員が大いに盛り上がった。我々は、ただ選手が喜んでくれることのみを考えてきた。そして最後の涙の別れ。短い期間ではあったが、心の通い合った思い出としていつまでも心に残るであろう。それにしても、子どもたちを含め、地域の人々のパワーってすばらしいと感じさせられた国体であった。



民泊の思い出

民泊家庭 石田壽照

試合は熱戦であり、選手の皆さんたちが日ごろの練習の成果を発揮されて、コートを所狭しと走り回り、飛び散る汗とキュッ、キュッというシューズの擦過音と歓声と時にため息がします。応援席では、長岡外史リーダーのもと大声援を送り、応援席も一体となつての試合の展開でした。選手の方の中には時に鬼の形相があります。仏教では、阿修羅というのは戦いの神であり、仏法の護り神のことですが、私どもも人生の大切な場面においては、歯を食いしばって戦い抜くことが必要なときがあります。試合において、そうした真剣な表情を見られたことは感動の一場面でした。

北海道選手団の皆さん、今日は山口国体5位、日本で第5位ご入賞まことにおめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

皆様の今後の益々のご活躍を念じ上げます。

民泊の思い出

民泊家庭 数井忠義

昨年の秋、いよいよ民泊家庭の募集が始まりました。我が家は、民泊拠点施設の久保公民館にも近く、断る理由もありませんでしたので引き受けることにしました。何度かの研修、会議があり、来松の日が決まりました。それからは、家の掃除や、買出し等で忙しい日々が続きました。私は、お出迎えの太鼓の指導もしていましたので、早めに公民館で待ちました。民泊する子どもたちはどんな子ども達だろうと考えていると、すぐに到着です。無事に歓迎の太鼓、対面式を終え、民泊選手2人と一緒に公民館を後にしました。最初はお互いに緊張し合っていましたが、日に日に緊張もなくなり、娘たちとも意気投合していました。私を含め、他の民泊家庭の人達とで仮装応援をし、それに答えるように彼女たちも一生懸命プレーし、その迫力に圧倒されました。試合は残念ながら負けてしまいましたが、夜遅くまで2人の健闘を讃えました。楽しかった3泊4日、今度の山口国体がある時、私はこの世にいません。よい経験ができました。

ありがとう山口国体、ありがとう北海道！



民泊を引き受けて

民泊家庭 近藤哲也

民泊家庭として、我が家は監督を引き受けることになった。監督と私たちは同年配で、色々話弾み、山口県は竹が多いが、北海道には大きな竹がなく、細い竹や、熊笹ぐらいで、筍は採れないとか、我が家の近辺に柿が沢山なっているのを見て、柿木やみかんの木も育たないようだなど、同じ日本でも随分違いがあると思った。また、監督は学校の先生をしていただいたとのことで、話の中で、我が家の前の道が旧山陽道で、下松市史によると1200年前、馬屋を置いたのが往還道の始まりと言われ、豊臣秀吉が朝鮮出兵の時、兵が通ったとか、江戸時代には、大名の参勤交代の行列が往来した重要な道路となったとの話になった時、北海道は函館など一部の所を除いて、ほとんど明治時代から開拓されたので、古い時代の遺跡はないと、非常に興味を持たれ、朝早く起きて、近辺の写真を写すと出かけておられました。私達も監督から、北海道の良い所や、広いので上手な旅行の仕方など教えてもらったので、是非とも、元気なうちに北海道各地を巡ってみたいと思っています。

今思い返してみると、最初の心配はどこへやら。3泊4日はアツと言う間に過ぎ、民泊を引き受けて本当に良かったとしみじみ思っています。



民泊を引き受けて

民泊家庭 貞木雅之

春先から体調を崩していた私は、民泊をお引き受けできるか不安でした。9月までには元気に、との思いが源となったのでしょうか、無事国体の日を迎えることができました。北海道チームをお迎えすることになり、心躍らせて待ちました。

選手団の方々は、おおらかで、明るく楽しい人達でした。我が家には、札幌大学の高橋さん、脇坂さんの二人が泊まってくれることになり、私たちにもすぐなじんで、本当の家族のように楽しい4日間でした。早朝、コスモスを見に散歩したことなど思い出されます。

会場で偶然、脇坂さんのお母さんとお会いし、一緒に応援したことなど忘れることのできない思い出です。帰北の日、見送るときのこと、今思い出しても切なく、胸が熱くなります。もう一度会うことができたならと・・・・・・・・

国体を肌で感じる事ができ、皆さんとの出会いに感謝です。

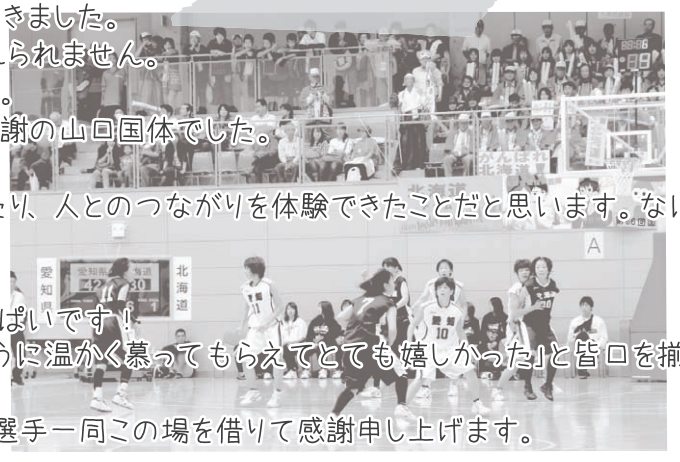
私たち北海道チームは、山口国体において山口県下松市久保地区の皆さんのご家庭に4日間民泊させていただきました。私たちは普段大会や遠征などではホテルや旅館などに泊まることが多く、選手・スタッフともに初めて民泊をする人がほとんどでした。

正直、初めての民泊に緊張と不安な気持ちでいっぱいでしたが、そんな気持ちも公民館に到着してからすぐに大きな期待へと変わっていきました。子ども達の元気な掛け声と太鼓から始まり、私たちの予想を遥かに上回るほどの温かな、そして盛大で素晴らしい歓迎に驚きと喜びの気持ちでいっぱいになりました。各々の民泊先でも事前から私たちのために様々なことが準備されており、何一つ不自由のない生活をさせていただきました。また、食事面でも毎朝・毎晩、衛生面や栄養面、カロリーバランスなどに配慮した久保地区のお母さん方が手作りで用意してくださった美味しいご飯をいただき、私たちは心身ともに万全の状態で試合に臨むことができました。試合当日は、さすがに明るい久保地区の皆さん！と思わせるようなド派手な衣装と応援で、この地区にも負けない大きな声援を送っていただきました。試合中も常に大きな応援が聞こえ「久保地区の皆さんのためにも勝って恩返しをしたい！」そんな気持ちで試合に挑みました。試合中、相手にどんなに点数を離されてしまっても「諦めるな！」「頑張れ！」とエールを送ってくださり、最後の最後まで「北海道～！北海道～！」という応援で私たちに元気とパワーを与えてくれました。結果は負けてしまい、試合に勝って久保の皆さんに恩返しをするができず悔しさと申し訳ない気持ちでいっぱいでした。しかし、そんな私たちの敗戦を誰一人責めることなく、逆に「よくやった。頑張った。」「お疲れ様」などと明るい笑顔で声を掛けてくれました。夜には歓送会を開いてくださり、私のためにこんなことまでやってくれるのかと思うと思わず涙が溢れてきました。歓送会では山口、下松の歴史や魅力をたくさん披露していただきとても楽しい時間を過ごすことができました。4日間を通して歓迎会や歓送会、練習会場の手配や送迎、試合の応援、食事や身の回りのことなどあらゆることまで全てお世話をしていただき本当に感謝の気持ちでいっぱいです。最初は不安な気持ちでいっぱいだった民泊。しかし、4日間久保地区の皆さんの優しさや温かさに触れ最終日には別れが惜しくてたまりませんでした。初めて出会った私たちに、まるで本当の家族のように温かく接していただいたことはずっとずっと忘れません。久保地区の皆さんと出会えたことで人のありがたみや温かさ、人との繋がりの大切さを実感することができ、貴重な一生の思い出となる経験をさせていただきました。

～選手からの感想～

- ・下松市の皆さんがとても温かい人たちばかりで家族のように思いました。
- ・本当の家のように感じるほど、毎日が会話の弾む楽しい日々を送ることができました。
- ・民泊で人の大切さと温かさを学ぶことができました。たぶん最初で最後の民泊であると思うが一度でも経験できて本当によかったです。
- ・朝「おはよう！」と久保地区の皆さんが元気よく挨拶をしてくれて朝から「頑張ろう！」という気持ちになりました。
- ・私は独り暮らしをしているので普段、なかなかバランスの良い食事を摂ることができていませんでした。しかし、今回バランスの良い食事を摂ることができて嬉しかったし美味しかったです。
- ・試合中も旗を振ってくれたり、たくさんの声援をいただいて、応援してくれている皆さんのためにも絶対に負けられないという気持ちになりました。
- ・必死に声を出してくれている皆さんの姿を見て、いつも以上にがむしゃらにプレーしようという気持ちになりました。
- ・今回民泊の方々からの応援をうけて応援してくれている人のためにも自分は頑張らなくてはいけないという気持ちを改めて持つことができ、初心に還ることができました。
- ・公民館に着いた途端からの盛大な歓迎は今でも忘れられません。
- ・本当の孫、子どものように可愛がっていただきました。
- ・たった4日間でも本当に一生の思い出です。感謝、感謝の山口国体でした。
- ・地域や家庭の温かさを肌で感じることができました。
- ・ホテルと民泊の違いは、その地域のことを直接聞けたり、人とのつながりを体験できたことだと思います。なにより、あたたかさに感激しました。
- ・また民泊したいなあと思いました。
- ・地域の人たちや民泊の方々には感謝の気持ちでいっぱいです！
- *選手の感想は数多くありましたが「本当の家族のように温かく慕ってもらえてとても嬉しかった」と皆口を揃えて言っていました。

山口県、下松市、久保地区の皆さんに北海道チーム選手一同この場を借りて感謝申し上げます。
ありがとうございました。



北海道バスケットボール成年女子選手一同